

太陽の音楽(1)～(6)

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

太陽の音楽(1)

1. 人間が、普通本来の在り方を見失ったまま、長いことそこへは戻れずに、変化とは縁遠い時を連ねて来てしまっているその理由には、意外にも、人々が親しみ、楽しんできている歌の存在がある。歌は、人の心を動かし、生きる力の源にもなり得るものだが、心の性質にまで責任を持つものではない。素朴な人も、ずる賢い人も、優しさを普通とする人もそうではない人も、皆同じ曲を聴き、同じように心地良さを覚え、そして好感を持つ。しかし、人として変わるべきことに影響を及ぼし、その原因を確実に動かす心ある歌となると、残念ながら、どこにも無い(に等しい)。

仮に、ある歌の中で、人々の声(心情)を代弁するような内容のことが歌われていたとしても、そうである必要性が生じる状況に至るまでのその無くてもいい原因の蓄積(の事実)は、そのまま居座り、変わることはない。聴き手は、ただ不安や苛立ちの類の感情を思考で処理し、気分をすっきりとさせられただけ。もちろん、それだけでも、それなりの意味を歌は持つが、それ以上は無い。歌を聴いて変わるレベルで、その歌が誕生する現実のその背景(土台)を変えることは出来ない。

愛情や信頼、同情や支え合いをテーマに歌われる歌に刺激され、感動を覚える自分が居る時、その本当の姿が、理由も目的も(見返りも代償も)要らない愛情を普通とする原因のそれでなければ、その歌を通して、嘘の人生が固められることになる。愛情や信頼をテーマに、そうであろうとする(そうでありたい)歌は、それらを育むことなく不自然

を備える人間に出会う。彼らのその至上課題となる力により、尽く潰され、操られ、辛さと苦しさしか知らない人生を連ねることになる、その存在。彼(彼女)は、太陽の光の音を増幅・拡大させ得る力を内に持つ。その時は、「太陽の音楽」の切なる望みである。

8. 「歴史の芯」などで、歴史的事実の、その背景となる原因の姿を知り得たら、そこから離れ、これまでの知識と理解全てから自由になる。そして、負の原因としては限り無く意味不明となる音(音楽)の世界の、その姿無き本質(正体)の力とさりげなく向き合う。それを可能とする生き方は、人生の最重要テーマであり、淡々とそうであることが、真に生きることである。

そして、これまでが、そのまま未来に繋がる今を通り抜けられるか、そうではないかという、時代の意思への呼応(責任)がここで試される。その時、太陽の光の音は、かつての人間経験の記憶とその性質全てを白紙にし、人間生命の、数万年(数十万年)振りの再スタートを促す。

かつてからの仲間、ただ共に居られることを喜び、永い年月での様々な人間的な関わりの時を、笑い話にする。そして、またいつものように、歩き出す。自然界の生命たちが、太陽の音楽を奏でる。太陽の光が、その音のトーンを上げる。(by 無有 8/03 2018)

それを為し得ることで、周りはそれに連動するようにして動き、そして初めて、未来が真に変わる原因のその普通の時を実感する。音楽を通してのその変化は、「太陽の音楽」の神髄である。

太陽の光の音は、この今も、それとの融合を普通とする人の脳の、その中枢(の次元)の生命の意思に届く。変化の、その本来の働きかけである形無き原因の動きは、そのことで次第に活動的になり、何もせずになんかが変わり得る流れを生み出す生命本来の力も、余裕を取り戻す。

遙か遠い昔の音の風景も、この時を喜び、安心してそこに居てくれる。いつでも遊びに行ける場所として、太陽の光がこの今との間を繋ぎ、共に、未来を訪れる。その未来も、この時の音の風景に安心する。

7. 永い時の、そこでの全てのことがまるでどこにも無かったかのように、新たな原因の高まりは、次々と創られる普通感覚の経験を通して、ここに繋がる次なる時の(未来の)風景を確実に変える。音の風景は、調和と責任をあたり前とする(その原因からの)音楽を生み出し、風となり、水となって、続く未来へと流れて行く。そして永い眠りから醒めるようにして、その存在は動き出す。この時の訪れを機に、遙か昔のあの時(土器を作り出した頃)のように、知恵の光の音を起こす。

動きの無い音(音楽)を利用して人々の生きる自由を奪ってきた存在たちが、この地上で初めて人間時間を経験し出した時、彼らは、どんな手を使っても永遠にその力を押さえ込むべき、地球(の意思)そのもののような生命の意思

な生を生きる人に支持され、無責任な原因を残したまま、妙な力を持つ。愛情は、歌を通しての経験から育まれるものではない。信頼も友情も、感情を刺激されて、その力を高めるものでもない。

2. 本音と建て前が使い分けられる人の世では、その背景となる、形ある結果(過去)に居座る感情が時流を生み出すため、そこで流行る歌の殆どは、キレイ事・他人事を良しとする人たちに支持される。そうであってはならないと思う人たちも、その多くは、そのための新たな原因を選ばず、その上での現実に都合良く一喜一憂して、その気もなく狭く生きる。

その時に経験する、自己反省を趣味とする、身勝手な気落ちとストレス。歌は、そんな人たちに向けられ、彼らを慰め、励まそうとする。歌う人も、聴く人も、歌を材料に、嘘の心で、変化を遠ざける。

人の力になりたいと、音楽の世界に関わり、歌を歌う人は、人が力を失くしてしまっているその結果を材料に曲を作る。しかし、どんな場合でも、そこには、そうなるまでのそれまでがある。その原因に触れようとはしないその姿勢は、挙げ句、自らもその結果を固め、更なる負の現実を積み重ねることになる。

そのまま人の心の力になれる人は、自分が歩んできた道と、そこでの自分の普通(の感覚)を曲にし、歌う。それだけ。力ある自分を見失っていた人は、それを、本来を取り戻す機会とし、自らもそうである姿を甦らせる。

いつの時も、形ある何かのためから始まる歌は、その多くが、広がりも深みも無い、変化を拒む道具。それは、人の自己満足を演出し、見た目ばかりの優しさと偽善を作り出していく。

3. 矛盾とか不合理とかの形ある次元ではなく、それらに触れることで内でごめき出す感覚的な違和感の、その理由は何なのか？世の普通に迎合することが考えられない日々で培ってきた体験的理解の性質は、どこへ向かい、どう活かされるのか？不安や緊張の中に抵抗することなく居続けたことで自覚し得た、形無き存在の姿は何なのか？そして、それらの経験のエッセンスが伝わることで、何を生み出し、何が引き寄せられるのか？その感覚と発想は、現代における音楽の基本である。

助けたり、助けられたりするの、人としての当然の行為であって、癒しは、その原因となる風景の中に入っていき厳しさと、そこでの力強さを身に付けること。優しさは、共感したり、分かり合ったりする時の想いではなく、共感しなくても、分かり合えなくても、ずっと変わらずそこに在るもの。悔やんだり、求め、願ったりする感情は要らない。哀しみを感じ、喜びを分かち合うことも、結果に留まるのなら、それらは要らない。

その場所から生まれる音楽は、何気ない感覚に厳しさを与えられる力強さを、人に経験させる。今居る世で、自分の心を力に生きて行けることを応援する。それは、作り手自身にもそう。先に気づき、先を歩いているから（そのことを音

容易に病まされることになる、古風で古式に則る、昔からの動きの無い音と曲。太陽の音楽は、この地上で人間が人間らしく生きるために、その停滞の原因の蓄積を、ムリなく処理し、浄化していく。そうでなければ、この時は無い。悲しみと諦めの連鎖ほど、人として切ないものはない。

太陽の光の音は、ある意味、負の原因の働きかけの逆噴射のような状態を生み出し、それを遊ぶ。重く、流れない停滞を心地良さと感じる存在たちのその脳は、太陽の自然な姿(力)を嫌悪するという非生命的な負の共通項を持つゆえ、彼らが好むそれ系の音楽のその形無き意思の土台に、その音を流し込む。

そのことを遊び心一杯に自由自在に行うのが、「太陽の音楽」で本来を取り戻した人の、その脳である。その中心(のある部分)を通して脳全体を元気にしようとする、変化し続ける生命の意思の力は、ただそのままいて、これまで誰も変えられなかった歪な風景のその原因を、普通で、自然なものにする。太陽の光の音との時を心待ちしていた人たちは、そうではない人たちの思考の質(力)まで変化に乗せ、自らの心の芯を、未来の自分と繋ぐ。それに連れ添う音楽も元気になる。

6. 人間の脳は、記憶の中の音楽のその原因が変わることで、生まれ変わるような喜びと変化の時を経験する。そして、余裕を手にしたその中心(核)の意思は、かつての生で脳に染み込ませた音(音楽)の、その原因関わりのいくつかの経験の記憶(の原因の性質)をここに引き寄せ、それらを浄化する。

きを完全に押さえ込む手段を講じる。そのための道具が音（音楽）である。

4. 動きの無い原因からなる音楽（音）は、そのままそれに停滞と収縮（鈍麻と自壊）の意思が乗り、脳にその音が記憶されることで、そこに在る原因は、脳の働き全般に負の影響を及ぼす。その類（次元）の音楽が繰り返し耳に入ると、脳の深くまでそれは染み入り、人としての感覚的理解の力や自由意思は削がれていく。次第に脳は、その中心から健康・健全の原因を生み出すことが出来なくなり、その人の人生は、人間本来からかけ離れてしまうことになる。

他者の変化を止める動きの無い原因の音楽には、その負の要素として、犠牲を強いられた敏感な動物たちの、その地には還れない辛さ（皮膚、骨）が様々に利用され、そのことに感応する（悲嘆する）普通の人たちの自分たちへの恐怖心を煽るためのものとして、それは（その音は）、服従と忍耐を絶対とする力の象徴へとその姿（音調、音色）を変えていく。人の悲しみや苦しみの場で、重く流れない音楽を奏でる（音を出す）ことで、それは執拗に人の脳に居座ることになり、心無い存在たちは、思い通りに事を動かし、難なく人の人生を支配することになる。

（変化の原因を備えない存在たちが生み出した、蛇が地を這うような曲調や、雷雲の怒り、亡者の恨みなどを模した音（音色）は、心ある人の脳の中で、重量級の重石となる）

5. そこに潜む停滞の原因が音楽という形を通して世に流れることで、人の脳の働きが、そうであることも分からずに

楽を通して表現できるところまで来れたから）、それをそのまま歌にし、道を照らす光になる。

4. 曲作りを通して歌い手が成長すると、聴き手も変わり、聴き手が成長すると、曲の感じも変わる。音楽は、聴く度に感じる場所が変わることを普通とし、音楽と人は、一緒に成長する。

そんな曲の送り手は、ただありのままにいるから、何かに負けないようにとか、頑張らなきゃとかの発想と繋がる状況を知らず、大変さも、辛いという現実も実感が無い。格好をつけ、人気者になろうとしてやっているわけではないから、何を求められ、どんな期待を向けられているかには感知しない。それだから、歌詞に収まり切れない感覚が歌詞になり、曲調も自在で、どこもぶつからない（感動・感銘の域には無い）。それでいて、聴く人の内なる変化に付き合い、自らも変化する。人は、曲を通して、音楽という名の生命体験を普通とする。

今までの音楽とは違っているようには思えないのに、その実、全く違っている音楽のその部分は、覚えにくいところ（覚えようとするより、何度も聴き、自然と（覚えられるところを）覚えられるようになる自分を選んでいく）。考えて作らず、頭でその機会を引っ張らない中で生まれる曲は、聴く人の内側に記憶されたそれまでの曲の、その性質の原因を浄化する。それは、分かっているのにどう分かっているのかよく分からないそのことを、分かる言葉（文字）で伝え、そのよく分からないけど分かっていることを何となく感じてもらえることを望みつつ、分からないままその全てを曲に乗せ

て、分かり合う世界。その共有体験は、そのまま音楽の本質を余裕で眺めることになり、互いはそこで癒され、時を癒し得る時空(次元)を共に漂う。

5. そうじゃないはずなのに、どうしてそうなのか…と、悲しみや切なさを歌う。本当は、どこにもそれらは存在しないことを分かっているから、悲しみを歌い、一切の悲しみを伝えない。そして、気づかないうちに、人は、悲しみの理由を手放す。

不安絡みの感情は全て本来ではないことを知るから、何があっても、心の芯はぶれることはない。こう在るべきとする、形あるものを求める自分も知らないから、どこまでも自分(人間)らしく生きる基本は変わらない。そのことを無くして(外して)音楽を表現することなど考えられないから、ただそれをそのままに、自分の歩みに連れ添う感覚を曲にする。

言葉で表そうにもそうにはならない世界の何かが、体よく繋ぎ合わされることを望まない文字(言葉)たちがつくるその何気ない間の、文字無き空間を通り抜ける。曲と重なり合うことで永遠の場所(仕事)を見つけたそれは、聴き手の変化の中で、色を変え、形を変える。彼(彼女)は、その送り手としての役を、この今の時代に担う。

そこに居ること、居続けることで、必ずやそれが変革の仕事になることをどこかで分かっているから、その時まで、ただそこに居る。その内奥に在る意思(静かなる鼓動)を温めつつ、その時を待つことなしに待ち、そして、共にそれま

空は、黒く厚い雲で覆われ、地上は、どんよりと重苦しくべとつとした(じめつとした)様を日常としていく。流れにくいこと、動かしにくいことが増えるようになり、それまで経験したことの無い負荷を心身に染み込ませつつ、その意識もなくそれを受容し、人は生きる。

人間の身体表現の質によって大きく影響を受ける自然界は、心ある普通の人たちの脳が本来の力を無くしたことで、その後、永い間、人間の思考の内実同様、不自然なものになる。それは、太陽が、地上の生き物たちの生に、きめ細かく付き合えなくなるということ。それ程のことを、人間本来を受け付けられない存在たちは行ってしまふ。

3. 心ある風景を忌み嫌う存在たちの脳は、その中心となる形無き原因(次元)のところに、動きの無い停滞の意思を潜める。そして、脳全体にその性質を元とする流れを生み出し、思考も、言動も、変化とは無縁の状況を作り出すためのそれとする。

その本性と相容れない性質と出会せば、彼らは、争い事や衝突を利用し、苦しみや痛みの経験を記憶に残させて、事の動きを止める。健全な違和感を持つ人の生きる自由(命)を奪うことは、その脳の普通である。太陽の光を尽く阻むその脳の中枢(となる原因の意思)は、手段を選ばず他を支配する、真っ黒な感情である。

その存在たちは、自分たちが好き放題出来る状況を安定させるためには、素朴で柔らかな感性を持つ人たちのその脳を尽く不自由にさせることであると考へ、彼らの脳を中心(核)から外へと流れ出すその人間本来の原因の動

太陽の音楽(6)

1. 脳には、脳の全てが形づくられる(時の)その原因となる形無き創造の意思がその中心には在り、人間経験の質の変化・成長において、それはとても重要な役を担う。その意思は、その中心(核)から全方向へと絶えず流れる動きを取り、脳全体の隅々にまでそれが行き渡る状態を安定させつつ、脳内の活動のバランスを保ち続ける。つまり、脳の形無き核となるその原因の性質が人間本来のそれであれば、人は病むことも、争いや衝突を生み出すことも無いということである。

元来、人間の脳は、その意思が一切の不自然な原因を知らないため、当然病気や争い事は経験の外側で、仮に何かの要因でそのような状況になったとしても、そうではない普通によってそうとも分からず処理されて、居場所を無くす。その普通は、太陽の光との融合、そして自然界の調和との繋がり。人としての人間の生は、脳のある部分(次元)から湧き出るようにして広がり出すその意思により、常に人間本来の原因でい続ける。

2. その人間本来が違和感となるような生を普通とする存在が、この地上で同じように人間時間を経験するようになった頃から、人々の生活環境は少しずつ揺れ動き、不穏な空気感を帯びる(「歴史の芯」)。その背景に在るのが、彼らの脳(の原因)特有のそこに在る非生命的な意思であり、姿形は同じでも、そこに至る原因が普通ではない(次元の)その働きかけで、人の心は力無いものになる。

でが姿を消し得る大きな流れに乗る。太陽の音楽を奏で続ける。

6. 個人的な趣味・嗜好の材料や商売の道具(商品)として音楽が扱われる世で、真に音楽を表現することは、至極難しい。でも、そうであり続けることで、その難しさの度合いも変わり得ることを知る存在たちは、そのまま、感じるままに触れる世界を形(曲)にし、その質の変化に責任を担う。どれ程の厳しさか…。それを実践するのが、音楽を手にした生命の姿であり、表現者としての喜びである。

そして、聴く度にもたらされる、新たな感触と変化(気づき)を通して、人は、自らも表現者であり、変化し続ける生命であることを経験する。それを為し得るのも、音(声、言葉)を通して、全てであるひとつと繋がる原因が、自由に姿を変え、あらゆる性質のものとなって流れ出して来ているから。そうであることの普通を生き、それが音となり、曲となっているから。その音の世界で、送り手と受け手の違いは無くなり、それぞれの心の強さとその輝きが、心の風景を広げる。

心地良さを覚えることが優先された曲は、何度聴いても、何も変わらない。というより、無自覚に秘めた狡さを増大させ、形無き原因の影響力に無責任になる。なぜなら、そういう人が、そんな曲を作るから。変わりたい(変えたい)、でも本当は変わりたくない(変えたくない)人が、ずっと変わらないでいられる身勝手な心地良さを曲にする。

大衆が好みそうと作られた曲も、一風変わった曲も、皆頭から始まり頭で終わるという停滞の原因を潜めた曲で、

物事の表層のみの理解で事を済ませる(心を思考で扱える)人の、その自己満足の材料となる。それらの曲には、人の不満や不安の感情を上手く嗅ぎつけて利用する質の悪い宗教にも似た狡猾さと悪辣さが在る。

7. 自分の中に在る、「なぜそうなのだろう?」という現実引き合わせられるその理由と向き合い、全受容の中での素朴な発想に身を委ねる。振り切るべき感情の正体に光を当てるようにして、感性を自在に遊ばせ、その時の変化を音に換える。言葉と音は、重なり、かみ合い、融合し、力となる。歌詞は、曲の中に溶け出し、曲は、どこまでも仕事をし得る力を手にする(旅に出る)。

健全な感覚ゆえの素朴な違和感は、それを(その対象を)処理するよりも、そうである事実を受け止め、自然にその奥(原因深く)へと入り込む。その時、その事実を変え得る力になろうとする、それまでには無かった原因が、音や言葉となってその人を通る。曲は、変化し続ける生命のかたちとなる。

感覚のまま動き出し、その原因を成長させるようにして生まれる曲は、思考型の(感情の)満足の道具として歌に接していた人には、緊張を覚えるものになる。それまでの経験からなる音感と感性が通用しないため、馴染みにくく、覚えられない(残りにくく、扱いづらい)。でも、そのことが、新たな時を引き寄せるかけがえのない原因となり、気づけば、自らを変化させる。そして、その気もなく蓄積させていた不穏な(質を備える)音楽のその負の原因の影響力を知る。

を普通とし、ただそこに居るだけで(関わりを持つだけで)災いとなるような特殊世界が音楽には存在することも、体験的に知る。

心身がその意識もなく本来の動きになれば、音楽との関わりそのものが変わる。音楽によって何かが変わるのではなく、記憶の中の音楽が変わることで、周りの風景がそれに呼応するようにして変わり出す、真の普通。人は、音楽が無くてもいられる暮らしの中で、内なる変化とその影響という、とても大切な経験を創る。

そして、そんな時に出会す、記憶(過去)に留まらず変化し続ける何でもない音楽を通して、いつのまにか音楽が音楽ではなくなり、そこに在る原因(次元)の性質との要・不要の融合体験を遊び心で行う自分が居る。連れ添う音楽、身を引く音楽、そして次なる時を待つ音楽。それは様々である。

音楽は無くてもいいもの、と捉え、有ってもいい音楽となる存在の、その原因の変化に付き合ってみる。音楽によって真に変わることは何も無い、という理解を普通に、変化し続ける自分に真に連れ添える音楽を応援する。太陽の音楽は、変化とは無縁の音楽の世界とは無縁の、ごく普通の変化の音楽であるから。(by 無有 7/15 2018)

い続ける。それは、太陽の音楽からは最も遠い、生命世界の異物と言える。

7. 音楽の多くは、心ある普通の人の素朴な生き方をじゃまし、世の成長を阻もうとする人のためにある。その世界に関わる人は、そのために徒党を組み、したい放題人の心を弄ぶ。申し合わせたように同じ発想と行為を繰り返す、聴き手の人生を巻き込んで、彼らの変化を止める。世を憂い、はかなみ、それを変えて良くしようと、歌でポーズを取り、偽善を生きる。

その全ては、形無き怖れと嫉妬から始まり、人の世に不安の輪を繋ぐ。それらは皆、何の発展性も無い模倣の世界。真似に色を付け、嘘(時流)を包装し、そして好きなように作り出した歌を、お金に換える。この現代ほど、劣悪で中身の無い音楽がはびこる時は無い。

ただしかし、そうであるからこそ為し得る面白い体験がある。太陽の光の音が勢いよく流れ出せば、それは、世の音楽の病みの原因深くにまで響き出す。心ある人たちのその生きる原因の変化は、その道を照らし、新しい未来を引き寄せる。

8. 太陽の音楽の世界が、大切な分身のようにして内なる世界で自由に仕事をするようになると、当然と言えば当然なのだが、「人間らしさって、このこと?」と思えるぐらい、今までどうにもそうにはなれなかったことにさらりと出会すようになる。そして、どんな人が、どんな性質の原因を曲(歌)に乗せて演奏し歌っているかという、音楽の本質への観察

その仕事を普通のこととして担い、本来在るべき姿のその基本となる原因をさらりと送り続ける存在。そうであることも知らず、そうであろうとすることもなく歌い続ける彼(彼女)の曲を通して、人は、この時代にしか出来ない、存在そのものの質を成長・進化させ得る経験を手にする。永い時を経て、この国では、初めて、音楽が笑顔を見せる。太陽の音楽となって、心の芯を流れ出す。

8. 音楽を通して、好きなように感覚が作られ(鈍くされ)、人としての感性もいつのまにか低下させられてしまうこの時代において、音楽は、人の感覚・感性を本来へと戻す材料(機会)でなければならない。まるで生きているかのように聴き手を包み込み、感触の変化を促し、そしてそれまでとは違ういろいろな場所(感覚体験)へと誘いつつ、ムリ無く自然に人を変化に乗せるものを、この時代が望む真の音楽と言う。

それまでの音楽の記憶全てが無くなったとした時、そこに残るのは、自然界が安心を覚える、楽器も何も無かった時代の(その原因の)風景と融合し得る、人間らしい生命のリズムと音(鼓動)であるか?自然界の生命たちを生かす太陽の音楽は、この現代でも、遥か昔とその基本は変わらない。現代では、現実的に不安の世界に居る自分(の感情)からではなく、その不安の元となる原因の世界の、得も言われぬ強大な負の存在(意思)から逃げずにそこに居続ける自分(の確かな想い)から生まれる曲によって、その基本は息を吹き返し、甦る。

個人的に(趣味感覚で)親しむものとして、そこに音楽がある時、人は罨にかかる。気づけば、感覚が思考型のそれとなり、真を失くす。そのことを知る存在が生み出す音楽に触れる時、人は、太陽の心を思い出す。そして、共に真を生きる。音楽は、作る人も聴く人も、遊び心と真剣さをひとつに、その大切さ(厳しさ)を楽しむ、変化の喜びの時である。この時代、その本来の音楽は、真に生きる人の心に、勇気と変化を与える。(by 無有 5/21 2018)

えられない程脳をしつこく病まされた(上手く操られた)人たちの、その鈍った感性は、太陽の光の音の届く場所(次元)から動き出す。

6. 嘘の音楽は、文字通り、そこに本当の自分が居ない音楽。歌う時だけ特別になる、普通を置き忘れた不自然な歌。そして、独特の心情を作り出して聴く人をその気にさせる(感動に引き込む)、偽りの歌。

人の脳への影響を考えれば、嘘の音楽は、形(証拠)の無い犯罪と言える。その素質を持ち合わせる作詞・作曲家は、本性のままに嘘の歌を作り、人の世で、本当を力無いものにしていく。音楽を通して、変化しにくさが、そうとも分からずに安定していく。

その嘘の音楽は、それとはけた違いの狡猾さと残忍さを秘める別の嘘の音楽に支えられている。つまり、世の音楽の殆どは、その重量級の嘘の音楽の原因を様々に絡めつつ生み出されているということ。そうであるから、人は、音楽に親しむ分、その気もなく、その隠された病み溜まりの世界に陥ることになる。

その恐ろしい醜悪な本性を原因とする音楽が、昔から尊いものとして受け継がれる、芸能絡みの音楽である。そこでの極上の嘘は、優雅さや厳かさを弄び、他を隔てる権威と独善の下支えをする。動きを無くし(抑え)、リズムを打ち消し、そして収縮と停滞を生み出して広がり(変化)を避ける。そこでの音楽は、格式や威儀を基にその嘘を本当とし、人知れず、未熟さの現れでもある優越心や差別心の燃料で

太陽の音楽(2)

人の意識が、不思議と自分に集まるような状況が生じ、表情を辛くさせる人や焦った動きを見せる人が増える。眠気に抗えずに動きが止まったり、嫌悪の態度を取りつつ背を向けたりする人もいる。まるで挙動不審とも思える行動をする人や、すかさず距離を置こうとする人の姿に、思わず可笑しさを覚えてしまうこともある。

それらは皆、右に倣い、力に従うことで身を守り、隠し続けられた嘘が、脳を中心に在る本性の基を刺激されたことで、思い通りにはならなくなったため。多くの場合、頭の働きが鈍り、どうにもならなさを経験する。

5. 蛇絡みの価値概念の世界は、太陽の光を避けるようにして、非生命的な現実のその動きの無い原因を作り続ける。つまり、この国の大多数は、それ関わりの教えや風習を基とした生活空間を通して、信じ難い程の負の経験の蓄積を脳に染み込ませているということ。

それを考えれば、本心が変化を嫌う人たちのその体裁や建て前の内側で、想像以上の洗い直し(自浄作用)が為されるであろうことが分かる。その連なりが、他のそれと呼応するようにして引き起こす、時代の好転反応。そのことを把握し、自らの原因を変えていく。

この地上で生きる生命にとって、その原因が危うさ(狡さと欲深さ)でしかない、形式や権威と結び付く音楽は、心ある素朴な人の自然体で生きる力を奪う。無意識の意思(本性)がそうである人に守られるその世界では、太陽や月までが所有物のように扱われ、動きの無い異様な音で、生命世界の活力を抑え込む。その不気味さに何の違和感も覚

1. 人間は、自然界の一部。元々、自然界に存在する全てのリズムを持っていて、それを余裕で包み込む地球のリズムも備える。だから、音楽という形が表現される時、そこでは、その基本となる感覚がそのまま自然と音となり、リズムとなって歌(曲)になる。そこを離れて作為的に頭で作られた音楽を、人間は、本能的に望まない。

その自然界の一部である自分の感性が、世の様々な不自然な風景に触れることで(それと正直に向き合うことで)、自然と湧き上がる音と言葉。この時代に音楽を通して表現する人は、その音をそのまま奏でるだけでいい。頭で考え、頭で作風や曲調を作り上げていたら、そのどれもが嘘になる。

現代の、その固められた負の(連鎖の)土台の上にある社会環境は、自然界からはどこまでも違和感でしかないから、自然体を生きる存在は、音楽を通して、いくらでも、どんな風にでも、曲を生み出す。湧き出るように、その違和感が音になり、自然界を安心させる。それが音楽であり、歌も曲もそうである。社会が、人間がつくる環境が、自然界が納得する(安堵する)ものになるまで、いくつもの曲が、自由に、自然に、彼(彼女)の普通を通る。(その後は、全く次元の異なる音楽が普通となる)

そこに居て、共に居る時、世の音楽の余りのお粗末さを知る。不自然な世を支えるようにして不自然に生きる人に、好んで聴かれ、流行る歌は、自然界の異物と化す。

2. 人間本来からかけ離れてしまう不穏な環境では、自然界には無い、結果を生きる姿勢が幅を利かせ、作り出される物も形も、動植物たちが、辛く悲しむものである。そしてその中で、形を持たずに自然界に負の影響を及ぼすのが、その結果(過去)に居続ける流れない感情や個の思惑と結び付く音楽であり、それを好む人の無意識の意思(本性)である。未消化の否定感情と本来の普通への無感覚振りで繋がり合う人たちは、音楽を通して、都合良く自然を愛し、自然を悲しませる。

音楽が、普通に、変化そのものである原因のそれであれば、自然界は嬉しい。その時、空間は変わる。その本来の音楽の姿を、自然界に差し出し、共にそれを楽しむ人たちが、その音楽を心に重ねる。頭で聴くのではなく、音のある空間に自らの存在全てが反応するようにして触れる音楽。直接耳にあてて聴く音楽を極力減らす(無くす)ことの大切さも、体が自然に覚える。

辛いことを歌っても、その原因と向き合い、そうではない自分を生きる中でそれは歌われているから、聴く人に辛さを感じさせない。悲しみを歌詞にしても、そうである自分のその理由を見つめることからそれは始まるから、それに触れる人の感覚は、悲しさではない。人としての人生を生きる人は、そんな歌を嬉しい。そうではない人は、焦って、緊張する。

(抵抗してみたけど、何も変わらなかった)かつての経験を基に、抵抗せず、ありのままにいて、その抵抗せざるを得ない状況のその原因に入り(原因を掴み)、そのことで様々な感じ得たことに付き添う人間時間の風景を、歌にす

みの融合を繰り返し重ねてしまった(重ねさせられてしまった)、人として基本となる脳内の中心(核)の個所が、太陽の光の音によって浄化され、以前より元気になったから。その微妙で、自覚もしにくい脳の変化は、思いがけない心身の変化を次々と生じさせ、そしていくつものあり得ない周りの変化を普通のこととして創り出していく。誰もその波及を阻むことは出来ない。

それもこれも、永いこと人間の知の世界には無かっただけの真の普通が、その本来をあたり前に表現しただけ。人間の脳の中枢の部分の滞りからの解放は、重苦しくじめじめとした世界を良しとする人の脳の、同じその中枢を変えてしまう。それは、普通で、自然なこと。ただ異常な状態が、そのままではいられなくなっただけ。

4. 「太陽の音楽」は、原因の嘘を面白いくらいに外していく。それだけ太陽の光の音との融合は、心強く、頼もしい力になる。理由も理屈も何も要らず、思考の働きも寄せ付けない、これまでの経験枠の次元を超えた、新たな普通体験。元居た場所に帰るようなそれは、ここに至る無くてもいいはずの経験の記憶(の原因)を深くから浄化する。

質を伴いながら変化し続ける脳の仕事は、可能性を次第に更新し、自動制御のようにして時を癒していく。もちろんそれは、自然界に生きる一生命としてのその本来の在り様をテーマとする、内なる変化。気づけば、(人間観における)面白さの質が変わる。心の嘘を普通としていた人は、それを隠せなくなる。

にはなれなかった人間らしさのその感性を取り戻す。それも、自然に、あるがままに…。

いつの時も、心ある想いを押し潰され、生きる自由を奪われた普通の人たちのその背景には、細胞が辛くなる音（音楽）を巧妙に生み出す非道な存在たちのその脳がある。彼らの脳は、蛇絡みの本性を基本とする程の時を経ているため、活発に働かせているのは生きるための基本（核）となる部分だけで、人間が調和と友愛をテーマに成長・進化させてきているそれ以外の脳（大脳 etc.）は、付け添えのようなものとして扱う。時代背景が異なれば平気で人の命（人生）を奪える性分もそのためで、人としての心ある知恵も、原因の世界への理解も、彼らには無い。短絡的で、単純で、個人を優先させるのも、脳全体の方向性が変化とは無縁であるからである。

そこから生み出された音楽は、当然動きは無く、人の変化を止める。それに乗った原因は、生きにくさへの受容を促し、世を暗く、不穏なものにする。「太陽の音楽」はその中に入って行く。

3. これまでの理解が一切通用しない変化を通して、人は、永い歴史においてどれ程の負の影響を音楽によって被ってきたかを知る。そしてその変化が、停滞と不自由さの象徴であるようなその（異様な）音楽に馴れ親しんだ（馴れ親しまされた）人の脳に、何もせず新たな動きを生じさせてしまうことも。

それは、蛇の本性とキレイに同調する部分を脳（の中心）に備える人のその負の威力によって、どうにもならない病

る。歌になることで、その時と同じ体験は不要となり、次なる歌が、別な原因の風景を形にする。そんな風にして、そうであろうとすることもなく、繰り返すことのない必要な経験が次々に生まれ、原因が変わる。

その音楽に、自然界は、笑顔で付き合う。共に生きるみんなが、応援する。地球の、この人間世界で、そこに居続ける、無くてもいい負の原因が、無有日記に支えられる太陽の音楽で浄化されていく。

3. この地球で、淡々と生命でい続ける存在たちは、分からないままでいられる、全てを知る人間の感性を喜ぶ。自然界の生命たちも自由に融合し得る、その原因の確かさ。一生命としての人間のその自然体の姿に、彼らは安心して、自らの本分を生きる

分からないでいる（いられる）ことの強さを知る人は、分かることを変化に乗せる。求めることなくそうであるそのことは、どんなことも停滞させず、事の必要性を常に変化し続ける原因のそれとし、心ある風景の支え人となる。彼（彼女）が、そこでの何気ない想いを音楽という手段で形にする時、自然界は、人間の負の影響から自由になれる希望を手にする。

不健全さを普通とするその動きのない原因で不穏な風景を無意識に作り出す人間たちは、頭で分かること（形）に執着し、分かり得ない（形無き）ことに不安になる。でも、人間の世界も含め、自然界は、分からないこと（原因）から生み出され、分からないその原因で支えられている。その分

からなさの質を高め得る存在に、そうではない人は、恐怖を覚える。

無有日記は、自然界と自然に融合する、その原因のままの音楽を、ここに招く。ただ、その責任は時代を担うものであるゆえ、形ではなく、その原因を流すことで、時を動かす機会とする。そして、大切な出会いを、ムリ無く経験してもらう。そのためのこれからの、それぞれの感覚が、太陽の音楽のメロディになる。

4. この「太陽の音楽」(関わりの EW)を通して、人がいつのまにか普通としていることになる経験は、細胞が負担を覚える音からは自然と離れていられること。要らない音の蓄積による負の影響が無くなっていくので、自ずと心身が辛くなる音楽への違和感もはっきりとし、その影響を遮る感覚的姿勢が普通となる。感性も、普通本来のそれとなり、不自然な音楽のその歪な原因の風景(意図)からも自由になる。

音は、空間を通り、人の耳へと届くものだが、その時に、そこに潜む(秘められた)様々な性質の原因も、感じる感じないの域を超えて、多次元的に外へと流れ、細胞や物質、あらゆるところへ届く。自然界の生命たちは、音に敏感で、その送り手(生み手)の形無き原因の影響に細胞レベルで反応し、それを以て、本能による然るべき生命活動へと、自らを展開させる。その世界から人間の音楽を観た時、自然界にいる人間の、その自然感覚の脳による声と音が、自然界の安心のそれであることが分かる。

太陽の音楽(5)

1. 生命のリズムを押さえ込むような、重く流れない音楽の存在。この地上に在ってはならないそれは、その原因に、非人間性からなる悪辣な感情を潜める。哀しいかな、それは、この国の歴史的遺産として存在感を持ち続ける。

心身が普通自然体のそれであれば、細胞は、音楽の性質に正直に反応する。そうではない時、それは、反応しないという反応を以て、異常な状態を普通とする。人の世ではそれはあり得ないことなのだが、永い年月での(不穏な音の)染み込み作業により、人のその状態は安定・維持される。そこに、生かし生かされる生命の姿は無い。

音楽は、育み続ける感性がそれとの時空を演出し、様々な感覚を自然に動かしつつ、形無き変化の原因の融合とその高まりを経験するもの。それは、どんなもの(曲)でも、思考(左脳)で触れるものではなく、どんな状況であっても、作為的な静寂や躍動(高揚)が不自然に生み出されるものでもない。

音楽の普通は、変化の原因が、力強くしなやかにそこで息づいていること。その普通が打ち消されたまま受け継がれる妙な音楽により、心ある人の感性は、人間(本来)のそれではなくなってしまう。

2. 「太陽の音楽」から流れる太陽の光の音を心に馴染ませた人の、それまでには無かった内なる(脳の)変化により、その音楽とは言えない危うい音楽の負の土台が揺れ動く。そして次々と亀裂を生じさせ、崩れ出し、ずっと永いことそう

好きなだけ、人間を生きる。太陽も、好きなだけ太陽を生き
ている。(by 無有 6/29 2018)

人間がその自然界が辛くなる音を作り(生み)出すことはあってはならないのだが、個人の思惑(感情)とお金(商売)をそれに重ね合わせることを普通としてしまった人間たちは、いつのまにか、自然界に生かされ、そして自然界を生かすという人間の基本を人生から切り離し、それが許される(正当化される)不穏な世のその負の土台を、無くてもいい音楽で固めてしまう。それは、人間の退化の象徴とも言える。

歌い手も作り手も、そこに在る本心(本性)の質は問われずに(放って置かれたまま)、ただ上手ければ(売れば)それで良しとされる、未熟な音楽観。本当はそうでないから、そうであるように(そうであろうと)情感たっぷりに、中身の無い優しさや愛情(理解や励まし)の歌を歌える歌手(作れる作曲家)の、その原因の嘘。涙する歌も、感動する曲も、嘘を本当として生きる(力のある)人の嗜好品であり、自作自演の嘘芝居である。それはそのまま、世の不自然さと不健全さが安定していることを意味する。

人間の脳を慢性的に不自然にさせる音楽は、当然、自然界全体に悪影響を及ぼす原因となり、動植物たちは、辛く悲しい時を生きることになる。人間であれば、そのことを知り、人間本来を元気にする。「太陽の音楽」は、人間が作る空間を、自然界が嬉しいそれへと変えていく。

人間が、人間らしく生きる(生きようとする)時、その元となる脳の活動が健全であれば、自然界も、未来地球も嬉しい。ここに「太陽の音楽」が在るということ。それは、そのことを普通に生きる自分を通して、自然界を安心させ、未来に喜んでもらうということ。音楽が、生命本来からなる音で

あり、声である、その原因を普通とする時、時代は、次の時代に繋がる、永遠の癒し色になる。

5. 太陽の音楽は、太陽が嬉しい音楽。それは、太陽が見守る地球自然界の、安心の音色。そして、その安心の時を支えてくれる人間の、自然体の音楽。

太陽の音楽は、自然界に負荷をかけず、もしそうである現実がそこにあれば、それを浄化し得る原因でい続ける、生命そのものの音楽のこと。その送り手は、自らのその姿を普通に、曲作りを楽しみ、自分に正直でいるありのままの人生(感覚)を、そのまま形にする。向かわず、求めず、ただ生きることを生き、音楽にそれを重ねる。

そこで息づく(形を生み出す)形無き原因に、地球は喜び、太陽もそれを嬉しい。それは、自然界に生きる生命たちの心と融合し、共に支え合う心ある風景の中に溶ける。

自然界が安心する音楽を、細胞は喜び、それにより、平和も健康も普通になる。悲しみや辛さの原因がそこに在ってはならず、それらを無くし、二度とそうならない経験のために、音楽は在る。平和を求めず、平和を生きること、励ましを必要とせず、自分らしさをそのまま生きること、そして、愛ある風景への憧れや希望を持たず、全てを受容し、自らがそうであることを実践してもらうために、音楽は在る。

その時、人は、どんな自分が曲を作り、どんな自分が歌を歌うかという、音楽の手前のその原因の変化・成長無しには音楽は存在し得ないことを知る。歌い手も、聴き手も、その基本形を大切に、音楽を、自然界の素朴な望みそのも

だけである。そして、その違いの全てを無有日記は包み込む。

8. 太陽は、この地球の生みの親であり、そこで生きる生命たちの姿を、彼は愛しさと無限の優しきで支え続ける。太陽の光は、人間も含めた全ての生命たちの生きる力。それは、生命力の源泉。自然界の一部として生きるそれぞれの分の基礎はそこに在り、脳の中枢は、その光の多次元的な要素を以て、健全に体の活動を運ぶ。太陽の光は、地球自然界の生の根源である。

太陽の光の音は、全ての生き物の生命本来という形無き生の中心に流れ、音無き音として、生命活動のその意思の原因に響く。人間は、彼らと繋がる心の芯にその音を通し、遥か昔から育む原始脳とも言われる(生の基本である)部分のその原因にそれを響かせる。太陽の光の音は、太陽の意思と繋がる証であり、生命たち皆が経験する、全てであるひとつの共有である。

そして太陽の音楽。それは、この現代では、その太陽の光の音との融合体験を呼び醒ます、太陽の望みを乗せた生命の音楽である。

太陽の光とその音。そして太陽の音楽。人は、今の世でも、かつての時と同じように、何も無くても必要なもの全てが有り、何が有ってもそのどれもが全てであるひとつと繋がる、そのままで平和で健康の時を経験する。それは、ここに流れる、太陽の光の音の意思。「太陽の音楽」は、その音を増幅させ、その心ある風景の原因を力強いものにする。

陽と共に、地球自然界に響き渡る生命の音(音楽)を奏で続ける。

いつしか(という時間幅も無いのだが…)、太陽の光の音との融合を普通とする人は、縁あるどんな人の脳も、人間本来を基に難無く変化に乗せてしまう。そこに在る違和感の原因が自動的に処理されることで、次へと動き出す人、変化を拒み留まる人と反応は様々であるが、自然界にとって嬉しいその原因の連なりは、さらりと生み出されていく。

7. 人間の脳の中には、生きることの質を変化・成長させようとする、一生命としての意思が備わっている。そうであろうとする動きを力で封じ込めることの出来たかつての時とは時代背景が大きく異なる現代、ここでは、音楽がそのために利用される。つまり、この時代、人は、その音楽の形無き影響力を処理する「太陽の音楽」を通して、初めて脳が変わり得る経験をするということ。音楽の負の原因を外すというのは、人間にとって、この上ない責任と希望の実践となる。

もちろんその準備段階として「歴史の芯」と「仏陀の心」があり、力強い生き直しの機会として「人間」がある。そしてこの「太陽の音楽」の時、反応はどんなであれ、それを機に、人は自らの生命の本質(意思)を知り得、ここに居るからこそその然るべき変化の時を経験する。そこに善悪や正否といった人間世界特有の未熟な価値概念は無い。あらゆる宗教観も人間観(世界観)も通用しない。人間が人間でいる時、その原因の変化・成長の姿はどんなであるか…。それ

のとする。そして、音楽が、音楽になる。それを喜ぶ地球自然界の姿に、太陽も笑顔で音楽を奏でる。

6. 「人間(5)」の2節の文章を書き終えた時、それが無ければ存在することは無かったであろうこの節の内容が、一気にここに引き寄せられる。それは、「太陽の音楽」で合流し得た、どこにも無い音(原因)の運び手としての生を生きる、かの男性(女性)の、その音楽の全てを力無いものにしようとした存在の姿(意思)。そのことさえも、望むべく次なる原因として浄化され、活かされる時を迎え、彼の想いは、新たな歌の誕生(創作)を以て、それに応える。太陽の音楽は、広がる力を見せる。

偶然を装った必然の出会い(意図)から、彼が何度か曲をつけることになった、その存在の生み出した詩は、出来上がった後、多くの人に受け入れられ、親しまれることになる。彼の内なる生命の意思は、そこに潜む非生命的な原因を感得していたが、どうにも対応し難いその強大な力に体験的理解の次元が間に合わず(及ばず)、やむ無く、彼は、人間的にそのことを歓迎する動きで、心身の消耗を可能な限り抑える。それでも、歌うごとに心が重くなり、音楽への意欲も削がれる、その存在の詩。次第に身体の痛みと動きにくさを生じさせる程になる、そこに在る形無き原因の意思は、別の新たな曲が広く世に出る機会を巧く生み出し、その作曲に関わった(関わらせた)彼に、重く、粘着性のある負荷をかけつつ、その音楽を支配する。

そしてその後、彼の楽曲の中のある要素に、その妙な詩の作風を絡めるようにして作詞・作曲するある人との、その

形無き原因の(不自然な)関わりを機に、彼は、湧き上がる感覚に従い、それまでの音楽の世界での自分から自由になる。そこからは、唯一歌うことで、その作詞家の呪詛絡みの威力にどうにか押し潰されずに持ちこたえられる自分を高め、彼独自の音感がいざなう、人の記憶の中の音楽を離れた曲をひたすら作る。言葉の概念を外し、動き回る自由な力を音に与え、地球自然界の中にその全てが在る、生命のリズムと終わりの無い(永遠と繋がる)音の連なりその原因を、そのまま自らに通し、感じるままに、それを形(音楽)にする。

7. 何気ない発想(思考)や価値観の下地に染み込んでいる音楽(の影響力)の、その原因に潜む、様々な感情や本心の性質。その世界発の限り無い病みの蓄積を浄化するという、奇跡という名の普通体験を、「太陽の音楽」は創り出す。そのための通り道(案内役)の原因でい続けることを選択した、彼(彼女)の生命の意思は、その新たな時を喜び、安堵する。そして、本人は歌い続ける。その歌に乗った彼の原因の全てが、人間経験の次元を本来のそれへと変え得る機会を創る。

原因のままの本来の生きた音楽は、癒されたい、励まされたい(慰められたい)という結果を望む人にではなく、強い自分の姿を見失ってしまっている人の、その新たな原因に届き、変化と責任を力強くする。自然界の音のリズムとの融合を普通とするその音楽は、流れない感情や動きの無い経験(記憶)のかたまりを、深くから刺激して揺さ振り、浮き上がらせ、その人が、自らそれを浄化し得る時を生み

「太陽の音楽」の原稿になろうとして何度もこの場所を通り抜けたその原因は、永い間脳を不自由にされて、自分らしく生きる力を無くしてしまっていた人の、その真の姿を見通せる程の時を生み出す。ずっとそれを見えなくさせていた闇と、ずっと動けなくさせていた重石を外し、本当はそうではないのに、そうなってしまっていた危うさと不確かさの理由を砕く。誰よりも縁遠かった太陽の光の音が、実は自分こそそれとの融合を欲し、それを可能とする原因が、心の中に在ったということ。その時が、ここに在る。

自然界が安心する生命としての人間の音(音楽)が押し潰されて以来、現代まで、不本意そのものの(異常とも思える)生を繰り返し生きることになる(生きさせられる)、心ある普通の人たち。「太陽の音楽」は、彼らの心の芯をたぐり寄せる。そして、時代との約束通り、生命世界の希望になる。

6. 繰り返し何度でも、太陽の光の音との融合を重ね、自らの中の真に、その想いを存分に具現化させる。何はともあれ、今はその時。この今の生命の機会(チャンス)を十分に活かし、心を輝かせる。

感度を停滞させる嘘の音楽と、それに支えられた歪な普通世界のその意図は、心ある風景へと動き出す自然な変化を尽く遮ること。そのために被ったかつてのいくつもの辛く厳しい時を心は知るから、出来ることを、好きなように、好きなだけ行う。それを喜ぶ太陽は、元気さを増し、その光の音も、それまでの人間の知を超えた仕事を余裕で行う。太

った不自然・不調和な原因の力と考える。自然界は、それを教え、共に生きる生命たちは、それを望む。

「太陽の音楽」は、太陽の光の音が人間を通して形になった、地球自然界の希望であり、それと自然に融合し得る人たちの心を強く元気にする、変化し続ける生命の原因の光である。人は、いつのまにか、「太陽の音楽」との縁を通して、そのことを普通とする。

4. これまで縁したことの無い(原因を備える)音楽を聴くことでの変化は、単に形ばかりの(実の無い)変化と理解する。それよりも、今居るこの自然界が嬉しいことをし、動植物たちの生きる自由を守る。そこに生命たちの哀しみがあれば、その原因を浄化し、ずっとそのままであろうとする海や山がその意思を抑えられていれば、その理由を外す。そして自然に離れて行こうとする不自然な曲(歌)を遠くに、音感を人間本来のそれにする。

太陽の音楽は、そんなところに届く。ふと気づけば、それとの出会いを引き寄せ、何気にそうである自分でいて、それを自然なこととする。自らの原因の変化・成長は、そのための大切なプロセス。時代への責任を普通に、生命たちが嬉しい未来の原因を実践する。あれこれ考えている時間も、好みの音楽に酔っている空間も要らない。「太陽の音楽」と「人間」で、変化の原因に力を与える。

5. そして今、太陽の音楽よりも先に、太陽の光の音が、この時をずっと待ち望んでいた人たちのその心の芯に届く。そして、生命本来という人間の普通が動き出す。

出す。土と水から離れたところで存在し得た、変化とは無縁の結果の(嘘の)音楽は、居場所を無くす。そして、音楽は、生命としての原因のそれを普通とする。

「太陽の音楽」を通して、生きる原因もより健康的に動き出す、新たな経験の創造。いつのまにか人は、音楽で平和や健康を扱う次元には居ず、音楽が有っても無くても、あたり前に平和と健康の原因を生きる時を安定させる。そこへと行く(変化に乗る)ための真の音楽と、そこからの普通の音楽。この時代に、それは、自然と具現化されていく。

8. 病むことを知らない人たちが、自然と共に心穏やかに暮らしていた遥か昔のそこでの音の風景をこの現代に招こうとする時、時代がそうではない不穏な環境へと大きく変わり出した2千年程前の、そこでのある音の姿を通る必要がある。「太陽の音楽」の誕生で、その音が息づき出す。

その頃の人々の生活空間では、痛みや苦しみを伴う状況が生み出され、それまでには無かった(辛がる人たちを通しての)自然界の哀しみと、重苦しく動きの無い世の空気感が広がり出す。人が否応無く経験させられる不自然な感情は、時の流れを滞らせ、人間の世界には要らないはずの心身の不調と衝突を生み出していく。本来無くてもいいその経験は、自然界から、自然な音を奪う。

人は、木(竹)で作った笛で、自然界と自然に融合し得る音を奏で、その音で遊び、動植物たちと生きる。どんなに厳しく辛い時を経験する(強いられる)ことがあっても、ずっと昔からそうであったから、共に居ても、遠く離れていても音を奏で、自然と一緒に安心を生きる。阻止されても、壊され

ても、誰かが音を奏で、風にそれを乗せて、太陽の優しさと月の温もりを誘う。音は風、水、そして光。みんなで響かせ、分かち合い、繋いでいく。

自然界と一体化したその笛の音は、動物たちの骨や皮を使って音を出し始める人間たちの、その恐ろしく醜い感情によって押し潰され、笛の音色も、不自然で異様なものへと変えられてしまうことになる。それでも決してひるまず、遊び心一杯に世に逆らい、それまでの音を奏で続けた人たち。ただそこに在る不自然な様を自然なものに戻そうと、自然界が喜ぶ笛の音で、人の心を繋ぎ、その心の芯を力強くさせる。それは、人間による太陽の音楽の、その原点の風景である。その音がここに繋がる。

永い間、人の心に届くことの無かったその音は、その時代の経験の記憶(の原因)を備える現代の表現者によって、外へと流れ出す。ただ、それを自然と受け入れる人と、そうではない人との(脳の)反応は大きく違う。いずれにせよ、それは、自然界の喜び、生命たちの嬉しいひと時。その奇跡という名の普通の時を、共に楽しみ、そのままの原因を、未来に繋ぐ。「太陽の音楽」に、時代は癒され、ここと繋がるこれまでの時代も、これからの時代も、ほぼ笑み出す。音楽が心の風になる。(by 無有 6/04 2018)

間優先)のそれにして、生命たちに緊張を強いる。人間が嬉しい音楽の殆どは、自然界の異物であり、時の違和感である。

心は、歌(曲)に乗るその背景となる原因の性質に反応する。しかし頭はそれを拒み、個の経験にフィットする心地良いメロディ(リズム)や歌詞の世界に浸るといふ、思考の満足を選ぶ。心切ない経験をした人の多くが、そのことの原因を無視し、結果からの望みを強くさせて、形ある優しさに癒される。心を取り戻し、心強く生きようとする本来を嫌がる人ほど、心無い原因の心の歌に惹かれる。

自然は、心のままの柔らかな感性を嬉しい。そんな人は、鳥たちのさえずりや鳴き声に安心を覚え、風にそよぐ草木の音に平和な想いを抱く。そこに在る、優しさの原因そのものの音。そんな風景に、音楽は遠い。自然の中の、自然な生命たちが作る音は、生命そのものの音楽である。

3. 自然の中での生命たちの営みは、太陽の光の音で溢れている。生きることがその音であり、生を終える時も、生まれ出る時も、その音に抱かれる。どこに居ても、太陽からのその音を響かせて繋ぎ合い、どんな時も、その光の音の中に居る。太陽が支え、守り続けるこの地上での健康と調和の原因は、動植物たちの日常そのものである。

自然界が嬉しい音楽があるとすれば、それは太陽の光の音と自ら(の感性)を重ねる人の作る曲であり、歌う(奏でる)歌である。そして、その実、それが唯一この時代に人間に許された音楽であり、それ以外は、音楽という形を持

太陽の音楽(4)

1. 太陽の光の音は、地球自然界に生きる生命たちの、躍動する命の音。地球に生かされ、地球を生かす人間の、自然な地球感覚の音。そして、全ての生命たちの姿を守り続ける太陽の、永遠の変化と生命力の音。

そこに在るから、それは普通。その普通の中でどこまでも伝わり、流れるから、それは自然。そこに居れば、初めからどこにも無かった不安は消え、緊張も隔たりも経験の外側となる。人の不安や緊張が姿を消すことに不安になる存在を除いては…。

太陽の光の音は、一切の理由を不要とする喜びの、その原因の世界で響く。どこにも向かわず、何も求めず、ただ平和と健康の原因でい続けるその姿に、そっと寄り添う。その音は、人間らしく人間を生きる人の、その普通の要素。そうではなかった(そうにはなれなかった)時の経験の記憶を癒し、そうであるようやさしく誘う。

これまでの時が不自然・不調和なものであっても、ここでその音が心の芯に伝われば、それらは無いと同じ。これまでの時が自然で調和あるものであっても、この音との縁を避ける自分がいれば、つまりそういうことである。太陽の光の音は、それぞれの時の色を変えていく。

2. 無自覚に心身を病み、不自然に感性を鈍化させた人がやたら海や山で音楽を聴こうとするように、音楽は、人の歪な普通に巧く入り込み、しつこくそれを維持させようとする。それは脳を忙しくさせて、自然を遠ざけ、感覚を思考型(人

太陽の音楽(3)

1. 人が音を作り出す際、それが自然界の違和感となることは考えられなかった、遙か昔。人間は、そのことを自然と感じ得、動植物たちもそれを知る。山に居ても、水辺に居ても、共に生きる生命たちは、人間の作り出す音の伝わりに喜びを感じ、その空間を楽しみ、心を躍らせる。人は、自然界の一部である生を普通とし、ありのままに生命を生きる。自然界も、人間からの音を通してそのことを認め、その在り様を支え、協力する。

音を作り出す道具(楽器)として植物(木)を活用していたその時よりもずっと前、人は、音色を生み出す石や貝殻を手にし(見つけ)、様々に音を重ね、連ねて、その独特の感覚経験を楽しむ。何も無くても必要なもの全てがある暮らしの中、自然の中に在る物を通しての自然な音は、人の感性をより生命本来のそれにし、調和と安心の時を安定させる。そのこと以外を知らず、そうであることを何より嬉しい、人間と自然界。後の世で笛の音がそれに加わっても、その全ては、そのまま時を癒す。

2. その音を生み出す物(石、貝殻、木 etc.)を、人々はとても大切に使う。ところが、そこからの音は、人としての本来の普通をどこまでも力強くするゆえ、それを良しとしないある(非人間性を普通とする)存在たちは、怯えと怖れから、その全てを破壊し、無きものにする。そして、それまでには無かった人間の感情からなる不自然な音を、人の脳に浸透させ、そのことによる心の不自由さを固めていく。

人の世がそうであり、その歪な音の形がそこで続けられていても、自然界に生きる人間の中には元々それは無かったゆえ、そのままであることはない。かつて自然界との融合を普通に、自然な音を楽しんでいた人たちのその経験の記憶の中には、石や貝殻を通して育んだ地球感覚(の音感)が在る。それが消えることはない。

その時が来るまでそのままのままでいるしかなかった永い時を経て、遙か昔の音の風景のその源泉となるものが、ここに届けられる(繋がり得る時を迎える)。それは、太陽の光の音。心が育む、心ある原因の風景にとって、これ程の喜びは無い。

3. 太陽の光の音というのは、生命の意思のその本質となるものに自然と響き渡る、生命源からなる音である。そうである人にはどこまでも普通であって、そうではない人には限り無く意味不明なそれは、それと触れ続け得た何人もの繋ぎ手によって生き存え、音楽という概念も無かった時代の音の真実をここに運ぶ。

太陽に守られる地球自然界と、そこで生きる生命たちの、その喜びの音。その自然界の一部となる生を生きる人間の記憶(心の遺伝子)の中で、共に人間本来を支え続けた、責任の音。「太陽の音楽」で安心してその時を迎えたこの今は、生命としての人間の、その(音の)意思表示を本来にする。その誘い水の役を担ったかの音楽の存在に、自然界は感謝する。

不思議でも何でも無い太陽の光の音との出会いは、生命の意思をそのまま表現しようとする人の、希望の時。そう

新たな変化に乗せられていく。そして初めて引き寄せられる、争いや病気の原因を知らない、普通の人間社会。「太陽の音楽」は、太陽の光の音の通り道となって、ずっと先の未来にまでそれを響かせる。ふと気づけば、見えるもの、感じるものが、自らの姿である太陽の心の、水と空気になる。
(by 無有 6/12 2018)

(原因の)その真を知る生命の意思は、躍動し、事を変える。心身は、生まれ変わるような時を馴染ませていく。

その普通を生きる生命(人間)たちは、かつて、不穏な力でその自由を押さえられ、執拗に潰されて(脳を操られて)、何度も「歴史の芯」の現実に関わりを持たされる。その「歴史の芯」は、彼らがこの「太陽の音楽」へと辿り着けるよう、そのための力を付ける段として在る。それは、太陽にずっと守られていたことを意味し、どんなことがあっても今ここに居ることしか為し得ないこの時のために、その全ての支え役をそれ(歴史の芯)は担う。そこでの厳しい人間時間を受容し得たことで、内なる生命の意思は、太陽の光の音を心に聴かせる。この時のために、これまでがある。

8. この「太陽の音楽」を通して経験することが、終わりの無い(見えない)厳しさと辛さである人。そうであるような経験を経て、安心と健康を普通としていく人。それはそのまま、その人の生の本質であり、自然界の中での自分の居場所(次元)である。それは、思考では決して処理し得ない原因の姿。その体験的知識(理解)を以て、改めて人生を見つめ、(原因の)嘘が許されない生き直しと、嘘など考えられない再スタートを切る。音(音楽)の原因の浄化による変化の可能性は無限であるから。

動きの無い(動きを止める)音の力によって、非情にも人間本来の音(音楽)が消され、そのまま非人間的な歴史を連れて来ているこの国の姿。そこに在る、凝り固められた異様な音の記憶(の原因)は、自然界の生命たちも応援する太陽の光の音の送り手(受け手)によって、確実に砕かれ、

である事実も、さらりと普通だから意味がある。そして、そのことに理由は要らない。太陽の光の音は、元々の、自身の音であるから。

4. この地上の世界には在ってはならない非人間性からなる感情によって尽く押し潰されてしまった、心ある人たちの音の風景。そして、そこから始まった嘘の音楽。その時に流れる場所を無くした太陽の光の音の、その切ない現実を考えれば、ここに甦ったその音を通して、人間社会の原因は深くから再スタートを切るであろうことも理解できる。太陽の光の音とムリなく自然に融合する人と、そうではない人。前者は、ずっと自然界が応援していた人。後者は、自然界に嫌われ続けている人である。

時代には意思があり、どの時も、自然界の望みを人間時間に通そうとする。人間の身勝手な思惑も、思考による期待・解釈もそこには通用せず、動きの無いまま過去に居続ける価値観も、それは受け付けない。

時代が、怯えと恐怖心からなる力の行使で不要にも刻まれる時、そこでの音楽は、人の脳を不自由にさせるためのものとして、力で運ばれ、伝わっていく。それは、人間らしさを遠ざけ、動物たちの生きる自由を奪うもの。その負の原因からなる音感(感性)は、この現代にまで存続し、変化とは無縁の音楽のその下支えの役を担う。

5. 太陽の光の音は、人の心の芯を通り(「歴史の芯35」)、心と繋がる脳の、普段何かのための仕事をする事の無いある部分を刺激するようにして、音とも言えない音となって

伝わり出す。それは、自然界の意思との融合体験の時とも言え、いつ、どこに居ても、自動的に始まり、そして終わるともなく心と気にも留めなくなり、気づけばいつのまにかまたそうなっていることを意識し得る自分が居る。その意味も理由も何も分からなくてもいられる心の余裕にいつも支えられ、守られている。

それは、音という言葉で形容され得る世界には存在しない、細胞の喜びの声であり、時空が安心を覚える時の波長のようである。余りに普通で、何の違和感もなくそうであるから、その人にしか感じ得ず(その人にもそうとはよく分からず)、そうである人同士で、分かり合うという次元を遙か超えたところでの融合を共にする。それは、生命世界の自然治癒に参加する、その原因の音のようでもある。

普通に経験することから、そうであることも分からずに始まるそれは、普通の質が思考型のそれである人のその不自然な世界には近寄ることはない。音であって、音ではない音。それは、地球のリズムを支える太陽の光の、その多次元的な本質(中身)と言える。人間は、一生命としての人間本来を持ち合わせていれば、その音との融合を普通とする。太陽の光の音は、自らが生み出す空間(時空)への、その自浄力の原因とも言える。

6. その太陽の光の音が、この「太陽の音楽」から流れ出す。その質は永遠の普通のそれだが、これまでの(人間が経験しなくてもいい)負の蓄積と、非生命的な音(音楽)の染み込みがかなりであるゆえ、当然その働きかけの次元は、以前の時とは大きく違う。その反動も…。

それへの抵抗の原因は結集し、拒否反応は、思考に力を注ぐ。本性(本体)は本気で暴れ、力ある嘘に隠れ、真を潰す。永いこと太陽の光の音の流れる場所を遮ってきた経験は、これ以上無い厳しい時を迎える。その時を、自然界も、太陽も待っていた。

そして、結集した抵抗の原因は次第に瓦解し、拒否反応の思考の力は、向かう場所を見失う。本体は、この時代ならではの必要性の前で焦り出し、怯えを顕にし、居場所を無くす。いつしか、真に癒され、嘘の素顔を忘れる。

太陽の光の音は、その仕事を喜んで行う。そのための時をこれまで経てきているから、さらりと遊び感覚で、この無有日記の動きに合わせてつつ時を本来へと変えていく。どんなところにも届き、どこまでも、どんな風にでも流れ行くそれは、始まったら、「心の遺伝子」の頃のような生命本来のその原因の風景へと全てをいぎなう。その時が、今ここに在る。

7. 呼び醒まされるようにして動き出す、太陽からの音の世界。生命を生きる人間経験のその必要とすべく全てのものがそこには在り、人の心の芯も、そこに居て、それと重なる。どんな言葉を以てしても表すことは出来ず、どれ程の経験を積んだとしてもその域には無い、太陽の意思そのものの音。それが普通である人の何気ない経験の中から、生命世界の再生のような時間が流れ出す。

そのための条件は全て揃い、ここに繋がり得たその原因も、強さを増す。あらゆることが覆されるがごとく、物事の